

more

楽

落語の中には、浄瑠璃（義太夫節）の一節が出てくるネタも少なくない。お互い深いかわりのある古典芸能同士。落語をきっかけに文楽（人形浄瑠璃）の世界をのぞけば、落語がもっと楽しくなるかも。

【濱田元子】

浄瑠璃を聴いたことも芝居を見たこともなく、けんかの仲裁を唯一の道楽としている割り木屋のおやっさん。通りかかった浄瑠璃のけいこ屋からごちゃごちゃともめているような声が聞こえてくる。お半・長右衛門の悲劇を描いた浄瑠璃「桂川連埋柵」の節なのだが、本物の家内内のおめ事と勘違い。その舞台の京都まで仲裁に向いていくが……。

この浄瑠璃をネタにした落語が「脚乱の幸助」。「お半長」として、幼い子供でも浄瑠璃を

落語に出てくる浄瑠璃の風景

知っているのが当たり前だったという、当時の庶民文化の一端がうかがえる。
「浄瑠璃は今のカラオケみたいなもの」と言うのは、文楽大夫の豊竹英大さん。素人浄瑠璃が盛んだった江戸時代から

庶民の生活まごまご

明治、大正、昭和の初めにかけて、さわりの文句は鼻歌で出てくるようなものだったらしい。「テレビも何もない時代で、それしかなかった。落語を聴く

と、いかに浄瑠璃の言葉が語り継がれてきて、市民の娯楽の基盤になっていたのかが分かります」と話す。

それだけに落語に登場する浄瑠璃の風景もさまざま。

下手の横好きの浄瑠璃を無理やり聴かせようとする旦那と奉公人や店子のすったもんだを描いたのが「寝床」。浄瑠璃の練習のため人の軒先を借りて語る「軒付け」では、「仮名手本忠臣蔵」の五段目や「菅原伝授手習鑑」

また、上方の夏の囃しの代表格「船弁慶」では、妻に内緒で舟遊びに出かけようとする喜六が「ちよっと、浄瑠璃の会へ」と、浄瑠璃を外出の口実にする。

折しも落語に追い風の吹く。今、「落語をきっかけに文楽にも親しんでほしい」と、落語家の桂米左さんと英大夫さんらがイベントを企画した。9月24日に大阪・天満天神繁昌亭で開かれる「繁昌亭DEおはんちよう」だ。浄瑠璃「桂川」帯屋の段・前（英大夫、三味線・鶴沢清友）と「脚乱の幸助」（桂雀松、「菅竹屋」米左）を上演する。

英大夫さんは「歌舞伎や落語から興味を持って、文楽に来られる方も多いです。両方の芸に刺激を与えられる機会になれば」と意気込んでいる。



アマチュアの義太夫関東一を争う「東都五十義会」の風景。戦後も浄瑠璃人気は続いていた—東京・向島見番で1953年5月



豊竹英大さん



桂米左さん

主な文楽公演日程

- ★「本朝廿四(にじゅうし)孝」「奥州安達原」
ほか—9月5～21日、東京・国立劇場小劇場
- ★「一谷嫩(ふたば)軍記」「御所桜堀川夜討」
ほか—9月26日、兵庫県尼崎市・アルカイツクホール▽10月2日、金沢市・石川県立音楽堂▽同6日=千葉市文化センター▽同9、10日=札幌市教育文化会館▽同14日、盛岡市・岩手県民会館▽同15日、仙台市・電力ホール▽同21日=名古屋市芸術創造センター